

森と海を繋ぐもの

古川 久彦

もう10数年も前のことになりますが、別府大学で生物学を教えていたことがあります。その頃は大分市に住んでいましたので、車で別大国道を通っていました。今は道路も拡張され、道路沿いの海の随所が埋め立てられて観光施設に変わっていますが、当時の別大国道は片道一車線で激しい混雑が続いていました。狭い道をゆっくり走ると、高崎山の裾から続いた別府湾の遥か彼方に鶴見岳連峰の緑が映え、白い湯煙に霞んだ別府市の街並みを望む雄大な風景を観ることが出来ました(写真1)。海のない山国で生まれ育った私はこの風景が大好きで、何ともいえない特別な風情を感じたものです。



写真1 高崎山と別府湾

その頃別府市では、他県からの在住者に別府についての感想文を募集しており、たまたま私もその一人に指名されました。観光都市としての別府についてはあまり知識がありませんでしたので、思い余って表記

に近い題名で雑文を書いたことがありました。先日、農水省主催の実りのフェスティバルの際に水産庁の方から、きのことの海の関係は？という質問を受けました。この唐突な質問に読者の皆さんは何と度外れなお思いでしょうが、私はそうは思いませんでした。むしろこの方は地球を取巻く自然生態系を十分に認識していて、その上に立ってこれからの水産業を考えようとしているのだと思ったのです。そこで私は、以前に書いた事のある関連論文の内容を思い出しながら、予ねてからの持論を交えて丁寧に説明しました。

別府湾は、観光資源としても大切な存在ですが(写真2)、水産業にとっても貴重な資源になっています。もともとこの湾は、国東半島と佐賀の関に囲まれた静かな海で、工業排水の流入も少なく魚類の棲息には適



写真2 別府市街と別府湾

した水質なのです。そのために鯛・かれい・ひらめなどの中型魚をはじめ海老・貝類の棲息量が非常に多いのです。これは、魚類の餌になる海水プランクトンが豊富に生息しているので、これを求めて様々な魚が集まってくるからです。つまり、食物連鎖の典型的な現象です。

ではなぜこの湾には海水プランクトンが豊富に生息するのでしょうか。その根源は森林にあるのです。大分県の実業は杉と竹と言われていますが、それは奥山地帯のことであって海岸に接した沿岸地帯の森林はすべてシイ・カシを中心にした落葉広葉樹林（写真3）です。この森林の地表に堆積する落葉落枝は長い年月の間に落葉分解性や木質腐朽性のきのこ（菌類）によって分解されます（写真4）。そしてこの分解物は降雨や流水によって徐々に流出し、やがて河川を経て湾に流れ込みます。したがってこの湾の海水中には、湾外の海水に比べて有機物が多く含まれているのです。言うまでも無くプランクトンは有機物の多い海水を好むのが定説であり、また海草類の繁茂にも適した条件を備えていることになります。このことが魚類の絶好の繁殖場所になり、また多くの魚類が安定して居住できる場所にもなるのです。つまり、海岸に繁茂する森林と別府湾の海水とは、きのこ（落葉分解性菌類）によって繋がっているのです。きのこ（菌類）という仲立ちがあるからこそ、別府湾は水産資源としてもまた観光資源としても、立派にその役目を果たす事ができるのです。

森と海との関係については、もう一つ魚付林というのがあります。これは、海岸に森林を繁茂させて海水面に被陰をつくり、ここにプランクトンを増殖させて魚類を誘致させるもので、この場合にもきのこ（菌



写真3 落葉広葉樹林



写真4 落葉分解性きのこ（ハナオチバタケ）

類）の仲立ち効果があることが認められています。このように、植物と動物と菌類の調和のとれた連携が、自然の美しさと共に人類に安定した恵みを与えてくれることを、改めて知ることが出来るのです。

私の説明を聞いていた水産庁の方は、混雑している会場内での立ち話しでは満足できず、後になって何度か別の場所でお会いしてゆっくりお話したことがありました。あれからもう数年を経ていますので、あの方のその後は知る由もありませんが、水産のご専門の立場でありながらきのこ（菌類）との関係にまで想いを巡らす才能の持ち主ですから、今頃はきっと高官の座についておられるものと思っています。

（2011. 11. 25 稿）